

第 38 回

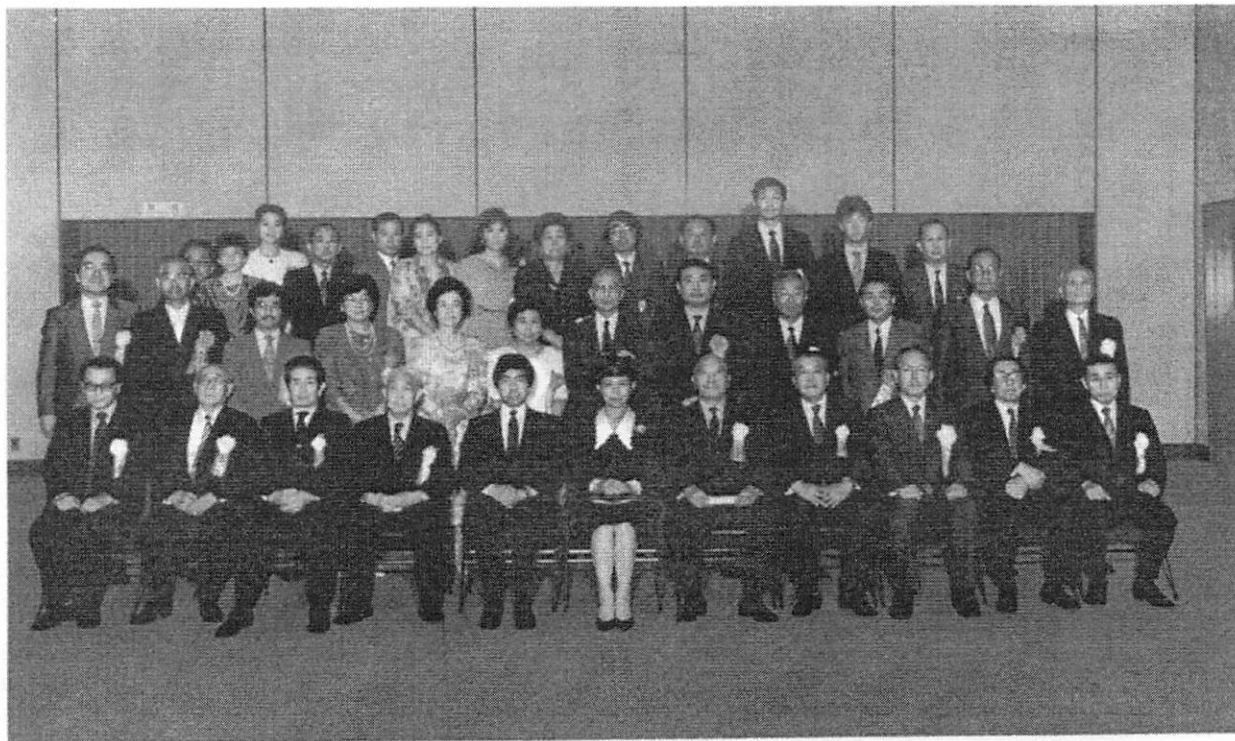
# 読売教育賞

## 受賞者論文集

「実践活動の概要」

1989年(平成元年)

読売新聞社



高円宮御夫妻を中心に、第38回受賞者  
と選考委員及び読売新聞社役員

(1989年7月4日、本社講堂で)

目 次

〔国語教育〕  
自己教育力につなげる作文指導

島根県松江町立  
川越小学校教諭  
山田 澄子……………7

〔算数・数学教育〕  
数学指導におけるCAIソフト利用  
——学習の個別化を目指した授業

岩手県一戸町立小島谷  
中学校代表(校長)  
野里 廣……………23

〔理科教育〕  
感動のある教育活動を求めて

広島県世羅町立西大田  
小学校代表(校長)  
井上 右三……………53

〔社会科教育〕  
二十一世紀の国際社会に生きる  
人間教育へのアプローチ

神奈川県川崎市立  
向丘中学校教諭  
永島 正雄……………65

〔障害児教育〕  
人間としての尊さを学ばせ  
生きる力を育てる性教育

東京都練馬区立  
旭丘中学校教諭  
永野 佑子……………83

〔学校の指導・運営〕  
個性を伸ばす学校づくり

福岡県北九州市立  
山の口小学校校長  
和田 啓子……………99

21世紀を拓く心の豊かさ  
たくましさ育てる学校教育

徳島県那賀川町立那賀川  
中学校代表(校長)  
稲飯 章……………115

〔社会教育活動〕  
生きた福祉教育の実践

山梨県ボランティア協会  
代表(事務局次長)  
岡 尚志……………127

自然の教室 知識と体験

東京都世田谷区  
自然の教室主宰  
秋山 元治……………139

〔教育委員会・教育研究所の調査研究活動〕  
生涯教育の立場に立った市民参加による  
『足利市の教育目標』の設定とその具現化

栃木県足利市教育  
委員会・前教育長  
中村 章……………155

〈表紙題字〉 読売新聞社社長 小林 與三次

教育委員会・教育研究所の調査活動

「生涯教育の立場に立った 市民参加による

『足利市の教育目標』の設定とその具現化」

栃木県足利市教育委員会・前教育長



中 なか  
村 むら  
章 あきら

一九二三年、栃木県生まれ。栃木県足利市立山田小などを経て、七六年から八八年まで教育長を三期。全国都市教育長協議会副会長なども歴任。現在は足利市体育協会副会長。住所は栃木県足利市堀込町二一六。

## はじめに

### 市民参加による教育目標づくりの底流

#### (一)「学校さま」

足利市街地の中心部に、歴史に名高い足利学校がある。

十六世紀半ば、わが国へやってきたザビエルが、本国にあてた手紙の中で、「坂東にアカデミーあり……」と書き、最盛期には、生徒三千人ともいわれた、その足利学校である。土地の古老の方々の中には、この足利学校を「学校さま」と呼ぶ人が多い。

長い歴史を通して、足利の風土の中に根をおろしていった足利学校に対する庶民の感情が、そう呼ばれるのかも知れない。

#### (二)足利の風土

栃木県の最南端、群馬県に隣接する面積百七十八平方キロ、人口十六万七千のわが足利市。

東武電車で東京（浅草）から北へ約一時間二十分。足利市駅のホームからのぞむ景観はまさに「東の京都」にふさわしい。

○「守りて聳つ両崖山や、抱きて流るる渡良瀬川や、自然の恵みの集まるるところ……」と足利市歌にうたう所以でもあろう。

この美しい自然と、長い歴史の織りなす足利の風土に息づく教育は、いかに組み立てられるべきなのか……。戦後の混乱期の中で、いちはやく、わたくしたちの先輩は、「国や県の一般目標の抽象性・普遍性を地域の実情に即して具体化し………精彩のある教育実践の展開を意図」して、この難問に取り組んでいった。そして、昭和

二十九年、「足利市教育の一般目標」を設定したのである。

#### (三)足利の胎動

それから二十年。社会情勢の変化のはげしさは、今さらくりかえすまでもない。地域の状況は、まず、物の豊かさが進む反面、連帯感の希薄化となつて急速に変ぼうし、住民の価値観は、ますます多様化していった。ある人は、家庭の教育機能の低下を憂い、人はまた、個性の喪失、世代間の断絶を指摘した。

そして、昭和四十七年、「足利市教育の一般目標」は、すでに時代をリードする力を失いつつあった。私は、昭和四十五年四月、足利市立愛宕台中学校長から、足利市教育委員会学校教育課長・教育研究所長を拝命した。

そこで、同年九月から四十八年度まで、教育研究所の所員とともに、その対策についての内部研究を進めていたが、部分的な修正では、如何ともしがたい状況であった。すなわち、従来の教育観・目標観では克服しきれない重大な問題が、その背景にあることに気づきはじめたのである。——時はあたかも、社会教育審議会や中央教育審議会の答申が発表された時期でありわれわれは、言葉の上だけでなく、実感をもって「生涯教育」なるものに触れる思いであった。

昭和四十九年度、新しい時代に即応した「学校教育のあり方」を求め、足利市教育目標設定準備委員会を設置し、本格的な研究に着手した。

しかし、われわれの求めつづけた新しい教育像は、学校教育の分野からだけの検討ではどうして

も描きつくせないことに気づくのにそう多くの時間は要しなかった。

翌五十年年度をもって、準備委員会は、その幕をおろし、新しく「足利市教育目標設定委員会」がお茶の水女子大学教授（現同大学長）河野重男、東京工業大学助教授（現上越教育大学副学長）新井郁男の両先生を指導者に迎えて設置されたのは、教育長として就任した昭和五十一年のことであった。

生涯教育の立場から、市民参加による目標づくりをめざした足利の胎動である。

#### (四)キャッチボールからチームプレーへ

##### （それから五年間）

全体会や専門部会だけでも少ない年度で十八回、多い年度は四十五回にのぼる協議が積み上げられていった。まさに、総力を結集しての取り組みであった。そして、足利市民一人の意識調査、回収率八十六％の高率回収、かくして、市民の目標設定への関心は、ますます高まっていった。

この調査の結果や、目標設定の経過は、広報誌「あしかがみ」や「栃木放送」によって、広く市民に報告されるとともに、一千人をこえる方々に対する第二次調査、小中学校をはじめ市内四十一団体、約四千人に対する報告会、市内五地区における中間発表会等を通して、寄せられた市民の声は、集約され、総括されて、再び市民のもとに返されていった。

不思議なものである。

試行錯誤の長い過程であっても、市民と目標設定委員会との間を、情報が往復する回数を重ねる

ごとに、目標づくりへの気運は高まり、議論もますます核心に迫っていったのである。

この足利市教育目標設定委員会は、市内各界の代表者百名によって組織され、総合調整委員会、目標起草委員会と四つの専門部会を構成していたが、それぞれがチームとしての力を内に蓄えながら、その英知を結集し、昭和五十六年一月十六日、「足利市の教育目標」の設定について、市教育委員会へ答申をした。

乳幼児期から高齢期まで、人生各期にわたる七〇の教育目標と、その教育機能連関。

生涯教育の立場に立った「足利市の教育目標」はこのようにして誕生したのである。

## 一、「足利市の教育目標」設定の

### 基本構想

#### (イ) 教育目標設定の必要性

足利市は、昭和二十九年に「足利市教育の一般目標」として、地域の教育目標を設定してきた。その中で、目標設定の必要性について、

「国や県の一般目標の抽象性、普遍性を地域の実情に即して現実に具体化し、目標観の貧困を救い、具体的な地域教育の目標の確立を図り、精彩のある教育実践の展開を意図する現場の要請に応じ……」とある。このように、地域の教育に対する主体的な取り組みをうかがうことができる。

今回の足利市教育目標設定の端緒がそこにある。すなわち、昭和二十九年設定の「足利市教育の一般目標」が、その後の社会情勢の変化に伴って、教育の動向や地域社会の状況も大きく変わり、その検討が各方面から要請されてきたところに、設

定の必要性を要約することができる。

とりわけ、足利市の新しい教育目標の必要性について、次の三点をあげることができる。

#### ① 時代からの要請

当時の社会情勢の変化や教育の動向の変化に対応できる、新しい地域教育計画の見直しを立てる必要性があったことがあげられる。

当時における教育に対する要請は、昭和四十六年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」や同年六月の中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」にみるることができる。

社会教育審議会答申では、「……このような激しい変化の中で、国民のひとりひとり、その生涯の各時期に応じて、新しい生活課題や学習要求をもつにいたり、あらゆる年齢層を通じて、たえず自己啓発を続け、人間として主体的に、かつ豊かに生き、お互いの連帯感を高めることを求めている。……」と述べられている。

また、「第三の教育改革」といわれる中央教育審議会答申では、「……近年、いわゆる生涯教育の立場から、教育体系を総合的に再検討する動きがあるのは、今日および今後の社会において人間が直面する人間形成上の重要な問題に対応して、いつ、どこに、どんな教育の機会を用意すべきかを考えようとするものである。これまでの教育は、家庭教育・学校教育・社会教育に区分されてきたが、ともすればそれが年齢層による教育対象の区分であると誤解され、人間形成に対して相互補完

的な役割をもつことが明らかにされているとはいえない。そのような役割分担を本格的に究明し、教育体系の総合的な再編成を進めるには、学問的な調査・研究が必要である。……」と述べられている。

以上のように、当時の社会情勢や教育の動向の変化に伴う時代の要請から、人間の一生を通じて、その望ましい成長と発達を助長するため、あらゆる年齢段階の人々に対して、最適な時期と場所でもっと適切な教育的作用を提供できるよう、教育体系の再編成をする必要があり、生涯教育の立場にたった教育目標の設定が問われていた。

#### ② 教育現場や市民からの要請

当時の学校教育・社会教育等の足利市における教育は、昭和二十九年に設定された「足利市教育の一般目標」に基づいて、その計画、実践あるいは教育行政が行われてきた。

例えば、本市教育委員会は、各学校が教育計画を立案する際の基本的な資料及び各教職員の教育活動の具体的なよりどころとなる「学校教育指導計画」を毎年作成し、教育委員会の努力点や施策を明らかにして、学校教育の向上を図ってきた。

しかし、昭和四十年代に入り、この学校教育指導計画の説明会において、地域社会の状況や教育の在り方等も大きく変わってきており、「足利市教育の一般目標」の見直し・検討の必要性が、参事者の教師から数多く出されていた。

また、「足利市教育の一般目標」の設定委員や市民の中からも、足利市の実情に即した新しい教育目標を設定する必要があるとの声があがって

た。

③ 足利市行政からの要請

足利市は、産業、経済の面で、周辺五市の中心的存在であり、隣接の地域を常にリードしていく立場にある。これらをさらに発展させていくためには、足利市民が自ら主体的に学習する能力と意欲を身につけ、心豊かな人間性と連帯感あふれる地域社会の建設をめざす人づくりにあるとの考えから、教育が果たす役割を重視してきた。

昭和二十九年設定の一般目標について、見直し・検討の要請を各方面から受けるとともに、国の生涯教育構想に関する答申等にかんがみ、昭和四十九年、足利市立教育研究所の調査・研究活動として、足利市教育目標設定準備委員会を発足させ、教育の今日的課題や教育の将来の方向、生涯教育の立場に立った新しい教育目標設定のための基礎的な研究・調査に着手した。

これからの時代は、「地方の時代」といわれ、教育の分野においても、地域住民が自主性をもって取り組む教育が問われており、また各世代を通じて、人々の多様な生活課題や新たな文化的欲求が増大しつつあり、社会における多様な教育・学習の機会を拡充する必要性が高まりつつあった。

こうした時代を先取りし、生涯教育の立場に立ち、地域に根ざした教育を市民参加で取り組み、今後の教育課題に対応できる教育を推進する必要があった。そして、家庭教育、学校教育、社会教育等のそれぞれにおける教育の役割及び、その有機的なかわりを明らかにするとともに、教育全

般を統合した長期総合教育計画の実施の見通しを明らかにする必要があった。

以上のことから、足利市教育委員会は、足利市の新しい教育目標を設定するため、昭和五十一年、足利市教育目標設定委員会を設置し、同委員会に諮問した。

(ロ) 教育目標設定の基本的な態度

昭和四十九・五十年の二か年間にわたって、教育目標設定準備委員会を組織し、目標設定のための基本的態度について検討した。ここで検討されたこととして、次の八項目があげられる。

- ① 足利市民の意識や実態を十分ふまえ、市民参加による目標設定をする。
- ② 足利市の社会的・経済的・政治的な生活の課題に根ざした目標とする。
- ③ 足利の風土に根ざした目標とする。
- ④ 憲法、教育基本法、学校教育法、社会教育法等の法令にのっとった目標とする。
- ⑤ 広く日本の社会の課題、ひいては国際社会の課題に結びついた目標とする。
- ⑥ 未来社会を展望し、現在及び未来に対応できるような目標とする。
- ⑦ 先進地域の実践を生かした目標設定をする。
- ⑧ 生涯教育の立場から、次のような教育の統合を図り、目標設定をする。

- 乳幼児期から高齢期に至る年齢的な発達段階に即した教育の統合
- 各種の教育機能の統合

(イ) 教育目標設定委員会の組織

足利市教育目標設定委員会設置要綱に基づき、四専門部会をはじめ、次のような組織をつくり、目標設定を進めた。(次ページ参照)

〈四専門部会〉

- 学校教育専門部会
- 市民としての教育専門部会
- 職業人としての教育専門部会
- 家庭人としての教育専門部会

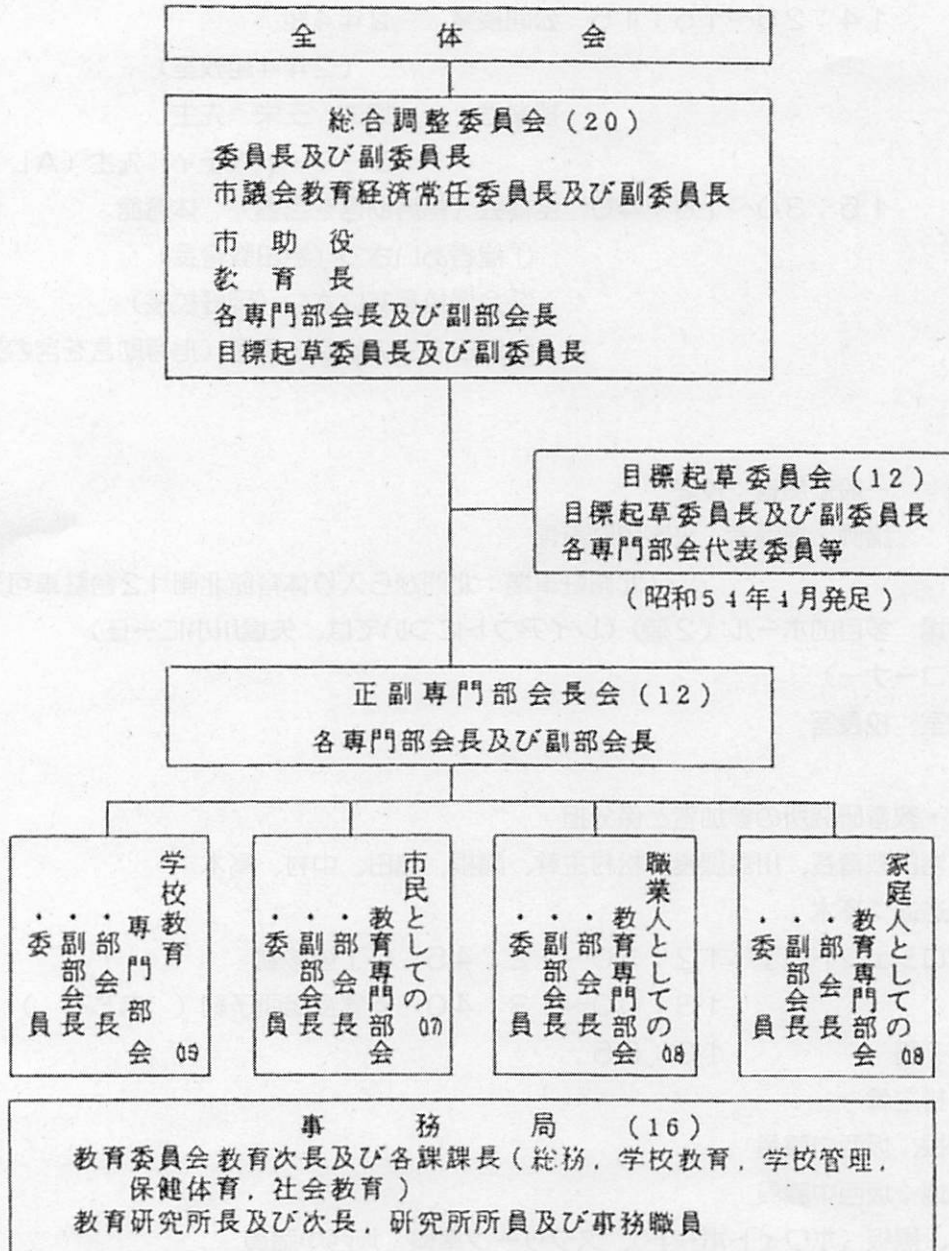
〈四専門部会設置の意図〉

◎人間の一生という時系列で、人生各期にわたる教育を考えてみると、学校教育以前の段階から家庭人としての子育ての教育があり、学校教育以後にも市民としての教育、職業人としての教育、さらに家庭人としての教育がある。したがって、人間の一生を通して行われるべき教育の問題点は、この四つの教育の角度から検討されることにより、生涯教育の目標として描かれるものが明らかになってくるものと考ええる。

◎現代社会及び未来社会を見通したとき、足利市の教育に要請されるものが、この四つの場の角度から検討することにより、明らかになつてくると考える。

すなわち、これらの四つの教育の場の受けもつべき責任と分担を明確にするとともに、市民の生涯教育に対するさまざまな願いや問題点を洗い出し、これらを全体的かつ構造的に位置づけることが大切であると考ええる。

教育目標設定委員会の組織(昭和55年度)



( )内は人数を示す



年 齢(歳)		0	5・6	11・12	14・15	22・23	42・43	60以上
人生各期		乳幼児期	児童期	青年前期	青年後期	壮年前期	壮年後期	高齢期
生涯を通して行われる教育の側面	学校教育	←————→						
	市民としての育					←————→		
	職業としての育					←————→		
	家庭としての育	←————→						

〔四専門部会の機能〕

これら四つの専門部会は、それぞれの教育の角度から、各種の質問紙調査や面接調査によって、市民の生涯教育・生涯学習に対する意識や実態を明らかにし、それらから教育課題を抽出し、教育課題達成のための具体的な達成目標の設定、達成目標を集約した形での教育目標の設定を行う。

また、各専門部会が作成した教育目標は、目標起草委員会において整理・統合され、人生各期の教育目標として位置づけられる。

各専門部会は、それらの教育目標達成のための具体策を、行政自らのものと市民自らのものとの二つの角度から検討する。

さらに、目標達成のための具体策をおし進めるために、家庭、学校、地域、職場、社会教育等のそれぞれの教育機能を明確にし、相互のかかわりについて検討する。

〔目標起草委員会設置の意図及びその機能〕

教育目標設定作業は、昭和五十一年から三か年にわたり、各専門部会の立場から、教育課題、達成目標、教育目標を検討してきた。

ここで、各専門部会で検討されてきたものを生涯教育の立場から整理・統合し、乳幼児期から高齢期にわたる人生各期に位置づけ、まとめあげる必要がある。

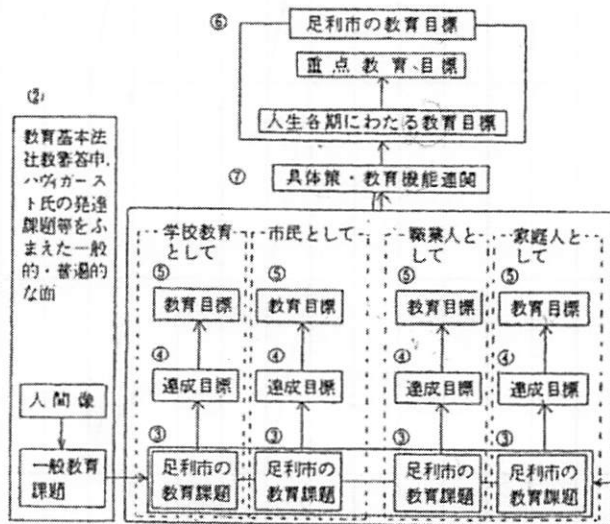
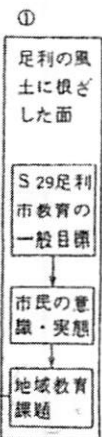
① 目標全文を起草し、足利市教育委員会への答申文案を作成する。

② 人生各期にわたる教育目標の中から、各主体者（行政・市民）が早急に取り組むべき目標や、特に重視していくべき目標として参考となる「重点教育目標」を設定する。

③ 人生各期にわたる教育目標及び重点教育目標について、その設定理由や意味内容等の解説文を作成する。

④ 教育目標設定の全体構想

目標設定委員会では、五か年にわたる目標設定手順の全体構想を立て、設定作業を進めた。



① 昭和二十九年設定の「足利市教育の一般目標」の検討、市民の教育に対する意識や実態調査に基づき、足利の風土に根ざした「地域教育課題」を抽出する。

② 各専門部会で、あるべき人間像や普遍性をもつ「一般教育課題」を抽出する。

③ 地域教育課題を一般教育課題の網目に通すことによって、一般性、普遍性を兼ね備えた「足利市の教育課題」を設定する。

④ この教育課題を達成するために、具体的な目標（達成目標）を設定する。

⑤ 各専門部会としての人間像や達成目標を整理

・統合する角度から、「部会としての教育目標」を設定する。

⑥ 各専門部会で設定した教育目標、教育課題、達成目標を整理・統合し、人生各期に位置づけ、「人生各期にわたる教育目標」を設定する。さらに、各主体者が自ら取り組むべき目標を設定する際に、参考となる「重点教育目標」を設定する。

⑦ 足利市の教育目標を達成するために、「具体策の策定」並びに「教育の役割とその他かわり（教育機能連関）」について作成する。

## 二、「足利市の教育目標」設定経過の概要

○ 昭和四十九・五十年（目標設定準備期間）

- ・足利市教育目標設定準備委員会発足
- ・教育目標設定の必要性についての検討
- ・教育目標設定のための基礎研究
- ・昭和二十九年設定の「足利市教育の一般目標」の検討
- ・教育目標設定の基本的な構想の検討

○ 昭和五十一年度（第一次）

- ・教育目標設定委員会の組織づくり
- ・教育目標設定に関する全体的構想の検討
- ・各専門部会による研究計画立案と基礎研究
- 昭和五十二年（第二次）
- ・秋田県生涯教育推進本部、大曲市生涯教育推進センター等の視察研修
- ・足利市民一万二千人を対象とした、第一次調査（主として意識調査）の実施

○ 昭和五十三年（第三次）

- ・第一次調査結果の考察とまとめ——「足利市民一人の声」として刊行
- ・教育関係者一、〇〇〇人を対象とした、第二次調査（主として実態調査）の実施
- ・第二次調査結果の考察とまとめ——「足利市教育目標設定に関する第二次質問紙調査のまとめ」として刊行
- ・教育課題抽出のための公聴会、各専門部会による面接調査の実施

・第一次調査、第二次調査、公聴会、面接調査等の結果から「足利市の教育課題」の抽出

- 「足利市で取り上げる教育課題」として刊行
- ・四専門部会で取り上げた教育目標、教育課題、達成目標についてのまとめ——「足利市教育目標設定中間報告書」として刊行

○ 昭和五十四年（第四次）

- ・四専門部会で取り上げた教育目標、教育課題、達成目標を整理・統合し、「人生各期にわたる教育目標」（草案）の作成
- ・足利市教育目標中間発表会の開催
- ・市内五会場において、延べ一、〇〇〇人の市民の参加のもとに実施
- ・目標設定三か年の経過報告と「人生各期にわたる教育目標」（草案）の発表と意見聴取——「足利市教育目標中間発表会実施結果報告書」として刊行
- ・「人生各期にわたる教育目標」達成のための具体策及び教育機能連関の検討

・「人生各期にわたる教育目標」の解説作成

○ 昭和五十五年（第五次）

- ・重点教育目標設定のための「意見を聴く会」の実施
- ・足利市教育目標中間報告会の実施
- ・目標設定委員が所属する団体の中で、四十一団体延べ四、〇〇〇人の参加のもとに実施
- ・重点教育目標設定のための意見聴取——「足利市教育目標中間報告会実施結果報告書」として刊行

・「足利市の教育目標」の全体像のまとめ

・人生各期にわたる教育目標（七〇目標）

・重点教育目標（一〇目標）

・教育目標達成のための達成目標、具体策、教育機能連関

・次年度以後の「足利市の教育目標」具現化構想の検討

・「足利市の教育目標」を足利市教育委員会へ答申、（三百六十ページ）からなる「足利市の教育目標」を刊行

・「足利市の教育目標」発表会の開催

・目標設定委員が所属する各団体に対し、「足利市の教育目標」について、目標設定委員による報告会の実施

## 三、足利市教育目標一覧（例）

※教育目標の進ちょく状況について、「広報あしかがみ」「栃木放送」等で延べ十五回広報し、市民の意見や要望を教育目標づくりに反映した。

# 一教育目標例一

教育目標番号 1

郷土の自然や文化に親しみ、その保護・発展に努める

① 目標達成の時期

児 童 期

② 達成目標

タイプ	達 成 目 標
D	1 努めて自然に接し、それを大切にすることができる。
B	2 郷土の歴史について、関心をもつことができる。
B	3 郷土の伝統的行事に関心をもち、参加することができる。
B	4 郷土の文化財を大切にすることができる。
D	5 高齢者の豊かな経験に学び、これを生かすことができる。

③ 具 体 策

- 郷土足利の自然や文化についてポスター、作文などで啓発
- 地域の社会的行事の開催と家族ぐるみでの参加
- 文化財めぐりの実施と参加（足利学校の見学等）
- 文化財周辺の美化活動への参加
- 名草キャンプ場における夏期教育キャンプの開設
- 野外教育施設の整備と活用
- 郷土の自然や歴史文化についての郷土学習の充実
- 「足利ふる里いろはかるた」の活用

④ 目標達成の場とのかかわり（教育機能連関）

- 学校では、地域の自然や文化を積極的に学習に取り入れて、その理解を図るように努める。
- 家庭では、地域社会の諸行事に興味・関心をもち、進んで参加する。
- 地域では、郷土の自然や文化の理解に触れる機会を多くする。

◎ 学校を中核として、家庭や地域との連携を図りながら、自然や文化の保護・発展に努める。

## 四、「足利市の教育目標」具現推進の

### 基本的な考え方

教育目標設定委員会は、昭和五十六年一月生涯教育の立場に立った、市民参加による「足利市の教育目標」を、五か年の目標設定作業の結果、足利市教育委員会に答申した。

それは、乳幼児期から高齢期までの人生各期にわたる七〇の教育目標と、その具現のための具体策および教育機能連関（目標達成の場とのかかわり）、そして、さらに、この中から、市民と行政が一体となって早急に取り組むべき目標として、一〇の目標を「重点教育目標」として取り上げた。そして、この教育目標を具現推進していくために、次の四点について具申がなされた。

- 一、これが推進は、教育委員会だけではなく、市行政全体であられるよう、そのための組織及び予算措置を願いたい。
- 二、市民がいつでもどこでも学習できる条件を整えらるとともに、市民自らもこの目標を受けとめられるよう、趣旨徹底の施策を配慮されたい。
- 三、生涯教育振興の立場から、家庭教育、学校教育、社会教育の果たす役割を十分発揮できる施策の配慮を願いたい。
- 四、必要な時期に、「足利市の教育目標」を評価しながら、その検討・改善を願いたい。

そこで、この具申内容をふまえ、昭和六十年年度までの五か年の見通しのもとに、次のような考え方で教育目標の具現にせまろうとした。

## —教育目標の解説例—

教育目標番号 1

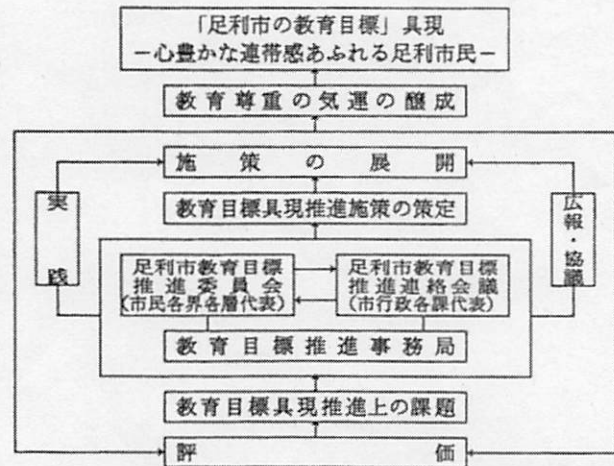
郷土の自然や文化に親しみ、その保護・発展に努める

目標達成の時期

児童期～高齢期

観 点	解 説
全体的な解説	○生活の基盤となる地域社会をよく理解することは、我々にとって必要なことである。特に、郷土の自然や文化を愛し、大切にし、それを後世に伝えることは、現在の人へ与えられた大きな課題であり、使命でもある
市民の意識や実態	○1次調査の結果では市民の特性として31項目中「自然を大切にする」は1位になっている ○2次調査の結果では、「郷土の文化の理解、保存、継承、に努めている。」の問いに対し、「はい」が29%「どちらともいえない。」が49%と答えている ○中間発表会における自由記述の中で「郷土の自然を愛する心を育てることを目標として取り上げてもらいたい。」「足利学校は、市民のふるさとである。」などの意見もある。
昭和29年の教育目標との関連	○29年教育目標では「自然を大切にし、また、生物を愛護するようになる。」「自然の美を味わい、文学・芸術への興味を高め、生活にうるおいをもたせるようになる。」とあげており、郷土愛を高め、文化の保護・継承に努めることの重要性の面から、引き続き取り上げられた目標である。
市民憲章との関連	○「足利市は日本最古の学校のある町です。」——教養を深かめ、文化のかおり高いまちをつくり、すぐれた伝統をさらに発展させましょう。—— ○「足利市は美しいまちです。」——めぐまれた自然を愛し、清潔で健康なまちをつくりましょう——に直接つながる目標である。
未来社会への対応	○自然や文化など再生産できないものを大切に保存・継承し、更に発展させることは重要なことである。
目標設定の理由	○以上のことから、地域の自然や文化財の保護などを通じて、よりよいまちづくりを進めることは、環境庁より伝統的文化都市環境保存地区に指定された足利市の市民として大切なことであり、特に、郷土の自然や文化についての理解が芽ばえる児童期から、それらの保護・発展に努める青年期及び壮年期、そして、若い世代にそれらを伝える高齢期において達成されるべき教育目標として設定した。

- (1) 教育目標推進連絡会議の設置
- 生涯教育の立場に立つ「足利市の教育目標」の具現化を進めていくためには、教育委員会の施策だけでは不可能であり、足利市行政全体で取り組めるような組織が必要である。
- そのため、昭和五十六年、次のような事業等を行う教育目標推進連絡会議を設置した。
- 事業
- ① 教育目標の推進に関する施策の策定に関すること。
- ② 教育目標推進の情報交換に関すること。
- 組織
- ① 議長は教育長があたり、推進連絡会議を代表し、会議を総理する。
- ② 委員は、別表のとおりとし、足利市教育委



昭和 63 年度  
足利市生涯教育推進連絡会議委員  
(昭和 62 年 改称)

部 課	委 員
企 画 部	秘書広報課長 企画調整課長 財政課長
総 務 部	行政管理課長 人事課長 同和対策課長
福 祉 部	社会福祉課長 児童家庭課長 健康課長
生 活 環 境 部	清掃課長 生活振興課長 公害課長 下水道課長
経 済 部	工業課長 商業観光課長 農政課長
建 設 部	公園緑地課長 道路課長
出 納 課	出納課長
議 会 事 務 局	議事課長
水 道 部	庶務課長
消 防 本 部	総務課長
教 育 委 員 会 事 務 局	総務課長 学校教育課長 (教育研究所長) 学校管理課長 社会教育課長 少年指導センター所長 文化財保護課長 管理指導員 (文化財団事務局次長) 社会体育課長 管理指導員 (市民体育館長) 学校給食センター所長 市民会館長 総合会館長
選 挙 管 理 委 員 会 事 務 局	選挙管理委員会事務局次長
監 査 ・ 公 平 委 員 会 事 務 局	監査・公平委員会事務局次長
農 業 委 員 会 事 務 局	農業委員会事務局次長

○ 員会が委嘱する。  
○ 庶務

① 推進連絡会議の庶務は、教育研究所において処理する。(別表)

(ロ)教育目標推進委員会の設置

市民参加によって設定された「足利市の教育目標」を、市民自らのものとして受けとめてもらうためには、前記の行政側だけの推進組織だけでなく、

く、市民の各界各層の代表者からなる推進母体を設置する必要がある。

そのため 昭和五十七年に、次のような事業等を行う教育目標推進委員会を設置した。

○ 事業

① 教育目標の推進に関する総合的施策の策定  
推進に関すること。

② その他教育目標の推進に関すること。

○ 組織

① 推進委員会は、次の三十人以内をもって組織し、教育委員会が委嘱する。

- ① 保育所及び学校教育関係者
- ② 教育関係機関・団体代表者
- ③ 学識経験者
- ④ 教育長

○ 庶務

② 推進委員会の庶務は、教育研究所において処理する。

(イ) 教育目標推進事務局委員会議の設置

教育目標推進連絡会議及び教育目標推進委員会が、その目的を十分果たし得るためには、そこで検討される原案資料の作成、教育目標具現推進に関する基礎資料の収集等が必要である。

そのため、昭和五十六年に、次のような事業を行う教育目標推進事務局委員会議を設置した。

○ 事業

① 教育目標の具現推進の年次計画、事業内容等の原案作成に関すること。

② 教育目標具現推進に関する基礎資料の収集に関すること。

○ 組織

③ 事務局長は、研究所長があたり、事務局委員会議を代表し、委員会議を開催する。

④ 委員は、別表のとおりとし、足利市教育委員会が委嘱する。

○ 庶務

① 事務局委員会議の庶務は、教育研究所において処理する。

総務課代表、学校教育課代表、学校管理課代表、社会教育課代表、少年指導センター代表、文化財保護課代表、文化財団代表、社会体育課代表、市民体育館代表、学校給食センター代表、市民会館代表、総合会館代表

(イ)行政各課における教育目標具現推進施策の策定

人生各期にわたる教育目標を具現推進していくためには、それらとかわりのある各課が、自らの主体性を確立しつつ関連し合い、目標具現のために、有効な施策を講じていかなければならない。

そのためには、教育目標推進連絡会議と推進委員会が相互に連携し合い、市民の目的な生活実践を促す施策をより一層推進していくことが重要である。

特に、足利市民が、いつでも、どこでも学習できる条件を整えることが大切である。

その一つとして、十七公民館及び五集会所総合会館等の各種講座・教室等の充実・拡大、社会体育教室や施設の充実等があげられる。

また、二十一世紀を担う子供たちを考えたとき、生涯学習の基盤を培う学校教育のあり方も問われる課題である。

このようなことから、教育目標具現推進の関係各課が、自らの役割を明確にし、他の課と相互に連携しながら、具現推進施策を策定していく必要がある。

(ロ)教育目標推進委員会並びに推進連絡会議委員自らの実践

市民一人ひとりが「足利市の教育目標」をふまえて、自らの目標設定とその実践を通して生きがいのある充実した生活を送るとともに、市民と行政が一体となって、希望に満ちた連帯感のあふれる郷土足利を築いていくことは、重要なことである。これらのことを具現推進していくためには、市民の各組織団体の代表者からなる教育目標推進委員会並びに行政各課の代表者からなる教育目標推進連絡会議の各委員が、会議で検討された事項について、自らの組織・団体の構成員にはたらかせるとともに、自ら実践していくことが必要である。

(ハ)市民の目的な生活実践をうながすための協議・広報

「足利市の教育目標」の具現にあたっては、あくまでも市民の自主性が尊重されなければならないが、同時に、市民の学習意欲を育てかつ、その学習を容易ならしめる配慮が必要である。即ち、市民一人ひとりの自発的な学習意欲を基本とし、市民一人ひとりが自ら積極的に学び、自己の啓発向上を図ろうとする意欲と能力を身につけることが大切である。

このことから、人生各期の教育目標を、市民自らのものとして受けとめ、自らの行動を起こす契機にもらうために、市民の実践活動の状況や学習の機会・内容等の情報を推進委員会並びに推進連絡会議において協議し広く市民に提供していく必要がある。

(ニ)具現状況評価の必要性

「足利市の教育目標」を具現推進していくためには、この目標具現にかかわる課題を明確にし、その課題解決に対する有効な施策を策定していくなければならない。

そのためには、目標具現にかかわる課題を事実に基づき具体化するとともに、それらを明確な展望のもとに構造的に把握することが大切である。

「足利市の教育目標」は、人間の発達の時時性と四つの教育の側面（学校教育、市民としての教育、職業人としての教育、家庭人としての教育）から、教育課題を抽出し、この課題を解決するために設定されたものである。

そして、足利市振興計画との関係から五か年を一サイクルと考え、昭和六十年までの期間を第一次教育目標具現化段階というように、五か年を見通した具現化計画を設定することが重要である。そして、市民の目的な生活実践状況、行政施策の策定・実施状況等を評価し、次の教育目標具現化推進の課題抽出のため、教育目標具現化状況評価を実施する必要がある。

五、「足利市の教育目標」具現状況評価の実施

前述のように、教育目標設定から三年が経過し、第四年次を迎えているとき、教育目標推進委員会並びに教育目標推進連絡会議を母体として、教育目標具現の数々の施策・事業を展開してきた。

その結果、足利の各地で「あいさつ運動」や「クリーン運動」などが起こりはじめ、それらが

大きく広がりがつある。

そこで、教育目標設定後第四年次を迎え、次の段階の教育目標具現化を考えると、次のような第一次教育目標具現化状況評価を実施した。

① 評価の視点

昭和五十六・五十七年度における教育目標推進連絡会議並びに教育目標推進委員会において、教

昭和五十六年度～六十年年度  
——第一次教育目標具現化段階——  
市民に目的的な行動をおこしてもらうため、市民及び行政の動きを“点”としてとらえる。

昭和六十一年度～六十五年年度  
——第二次教育目標具現化段階——  
市民に目的的な行動の広がりを起こしてもらうため、市民及び行政の動きを、“点から線”“線から面”への拡大としてとらえる。

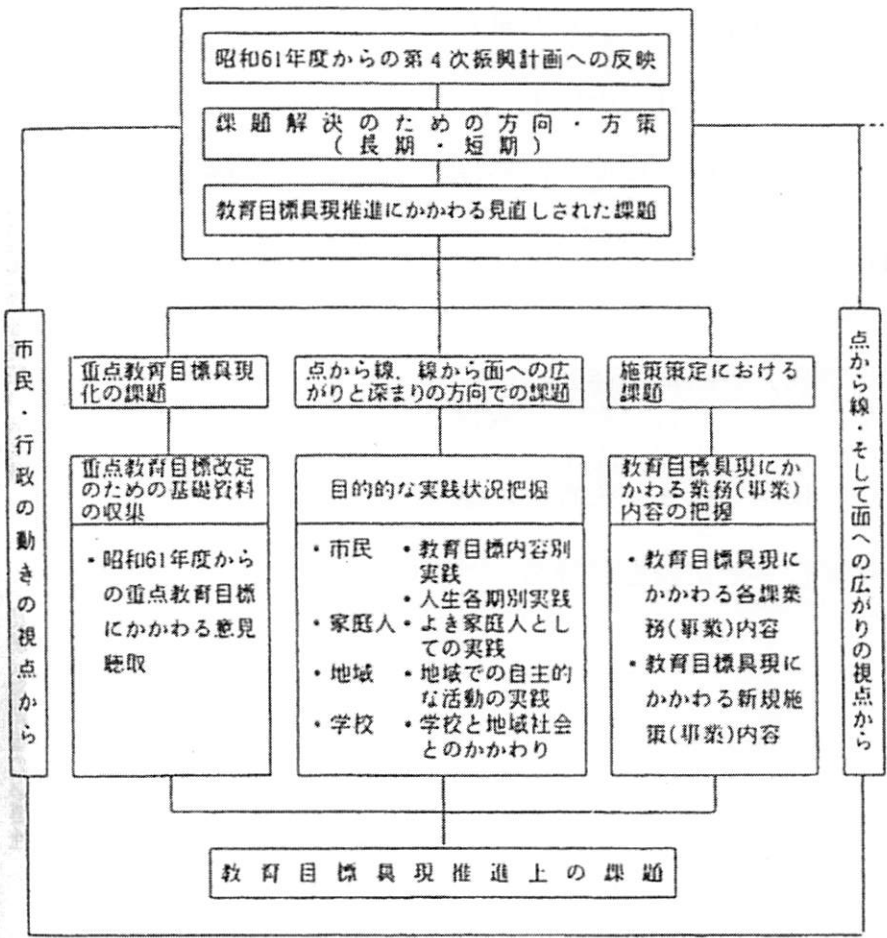
昭和六十六年度～七十年度  
——第三次教育目標具現化段階——  
第一及び第二段階の具現化をさらに進めるとともに、より具体的でより確かな展望をもって「足利市地域教育計画策定のため、市民及び行政の動きを総合的にとらえる。

教育目標具現の見通しとして、次のような各段階を想定し、評価の視点を設定した。

そこで、第一次教育目標具現化段階の評価の視点として、次のような点があげられる。

- 一、市民の生活実践を、目的的な、“動き”としてとらえる。
- 二、教育目標具現に関する関係各課の施策を

足利市地域総合教育計画策定



“動き”としてとらえる。  
三、市民並びに行政の“動き”を、教育目標の内容別、あるいは、人生各期別に把握する。

② 評価のねらい  
「足利市の教育目標」の具現化を着実に進めていくためには、より具体的な教育課題をうき

ばりにし、それらの解決に向けての具体的な施策等を、昭和六十一年度からの足利市振興計画に反映していく必要がある。

そのため、次のようなことを評価のねらいとして実施した。

- ① 市民の目的的な生活実践をより拡大していく施策の策定のための教育課題を明らかにする。
- ② 各地域における自主的な生活実践をより拡大していく施策の策定のための教育課題を明らかにする。
- ③ 学校と地域社会の相互補完の関係をより強くしていく施策の策定のための教育課題を明らかにする。

### (三) 評価構想

#### (一) 評価の実際

前述の評価構想等に基づいて、次のような調査内容で実施した。

- ① 市民の目的的な生活実践  
七十の人生各期の教育目標に基づき、課題抽出にかかわる四十九の調査内容と、教育目標の知悉度等を加え、五十二の内容を取り上げた。
- ② 各地域における自主的な生活実践
- ③ 学校と地域社会とのかかわり
- ④ 自主研修グループ等の誕生と広がり
- ⑤ 教育目標具現と各課施策・事業内容
- ⑥ 重点教育目標改定の基礎資料の収集
- ⑦ 教育目標の知悉度・教育目標具現に関する

### 自由記述

昭和五十九年九月上旬から下旬にかけて 市民八、〇〇〇人を対象に実施した。

調査方法、調査結果、考察等は、「足利市の教育目標」具現状況調査報告書を参照されたい。

#### (四) 教育目標具現にかかわる課題

調査内容のそれぞれについて、分析と考察を加え、そこで、今後、取り組むべき課題を抽出した。

さらに、市民の目的的な生活実践については、教育目標内容の柱である七つの柱ごとに集約し、「各地域における生活実践」、「学校と地域社会とのかかわり」を加えて、九つの課題とした。

これらの課題について、「二〇〇〇年の足利」をめざした「第四次足利市振興計画」に反映した。特に、基本計画の第一部に「市民文化の高揚と人づくり」を新設し、その第一章に「生涯学習の推進を位置づけ、それらにかかわる各種の施策を位置づけることができた。

### 六、教育目標推進委員会並びに推進連絡会議の主な活動

「足利市の教育目標」を具現推進していくためには、まず、教育目標事務局委員会において、推進のための施策の原案を十分検討することが大切である。その内容を推進連絡会議においてさらに検討し、各課の施策にのせるとともに、市民の組織・団体の代表者からなる教育目標推進委員会において協議されることになる。そして、各推進委員が、自らの組織団体の中で、市民の主体的な

実践へとつなげていくことになる。

このような基本的な考え方をもとに、教育目標具現推進施策・事業について、教育目標設定後の五十六年度から六十三年度までの歩みを、「教育目標推進委員会並びに推進連絡会議の主な活動」「教育目標具現にかかわる主な新規施策」について列記してみた。

### おわりに

「足利市の教育目標」は、子供は子供の段階で、青年には青年の段階で、というようにそれぞれの段階で身につけなければならない能力や果たさなければならない課題をふまえ市民の教育への意識や実態の上にならって設定されたものである。

一方、足利の市民は、足利の自然環境や歴史のあるいは文化的な社会環境の中で、日々の生活を営んでおり、市民の意識や実態も、当然、足利の地域性や足利の風土に根ざしたものと考えることができる。

このような特質を有する「足利市の教育目標」を具現していくためには、教育行政の「主体性」の確率が最も大切である。国や県の教育行政との調和を基調としながらも、その独自性を発揮しつつ、足利の教育課題をしかと受けとめ、豊かな教育風土づくりへの、より具体的な教育計画の策定とその実践こそ当面の課題である。

どちらかといえば、市民の学習への参加や連帯感のある地域社会づくりの活動など、今まで、市民の目的的な実践が「点」としての存在のみにと



どまりがちであったが、この教育目標のもとに、横に線として関係づけられ、やがて、面に拡大していく過程こそ、わが郷土足利が、その教育力をますます高めていく過程であると考える。

私が、この「足利市の教育目標」の設定とその具現にかかわりをもって以来、本市における生涯教育あるいは生涯学習の推進は、市民と行政の緊密な連携のもとに、着実な進展を遂げてきたと自負するものである。

しかし、情報化、成熟化、そして国際化のより一層の進展が予想される二十一世紀の到来を展望するとき、市民一人ひとりが、生涯学習を自らのものとして受けとめ、主体的に学習に参加し、目的的な生活実践を展開する生涯学習社会を早期に実現させることが、今の重要な課題である。

時に、文部省は、去年の七月、臨時教育審議会の答申の柱である「生涯学習体系への移行」を積極的に推進するため、新たに、生涯学習局を発足させた。

この意味において、生涯にわたって学習を行い、心豊かな充実した生活を送ることをねらいとする「足利市の教育目標」を具現推進することの意義は、まことに大きいものである。

また、このことは、市民一人ひとりが、その生涯を通じて、自らの資質、能力を伸長し、主体的な成長・発達を続けていくことになり、心豊かな連帯感あふれるまちづくりへの建設につながることになる。

昭和五十六年、教育目標の設定とともに、その第一の柱である「郷土の自然や文化の愛護」の具

現をめざして発足した足利市民文化財団は、十億円の基金を目標に、現在、市民からの浄財で七億円台までになっている。また、郷土資料館の建設も見通しが明るい。

同じく五十六年から着手した足利学校の復原工事も、十三億五千万の巨費を投じ、江戸時代宝暦年間の姿を、平成二年の十月に現わすことに至っている。完成のあかつきには、孔子の教えや論語等の講義、市民の生涯学習の場として生きてはたらくことになる。

さらに、平成元年度は、第二次教育目標具現状況評価の年にあたり、着々その準備がなされている。二十一世紀の教育を展望し、「足利市の教育目標」をよりどころとした新たな教育課題を浮きぼりにし、その課題解決に向けて力強く進んでいきたい。

私は、学校長三年、学校教育課長・教育研究所長四年、教育長三期十二年のしめくりとしてこの「足利市の教育目標」具現のロマンを、厚木高雄新教育長に託した。

美しい自然にめぐまれ、古い歴史と豊かな文化にあふれるわが足利市、足利学校のあるまち足利、このようなわがまち足利に、教育尊重の気運をより一層醸成していくことを祈念し、今後足利市民の一人として、微力ながら尽くしていきたいと考えている次第である。

事業名・内容等	時期・場所・対象等
<p>昭和五十六年度 — 教育目標理解の年 —</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○足利市教育目標事務局委員会議の設置</li> <li>○教育目標内容紹介パンフレット</li> <li>「心豊かな市民となるために」刊行</li> <li>○教育目標説明会の実施</li> <li>・教育目標を市民自らのものとして受けとめていただくために</li> <li>○教育目標具現推進講演会の開催</li> <li>・「生涯教育の立場に立った幼・小・中・高の教育について」 お茶の水女子大学教授 河野重男先生</li> <li>・「生涯教育の立場に立った社会教育のあり方について」 東京工業大学助教授 新井郁夫先生</li> </ul> <p>昭和五十七年度 — 目標の必要性に気づく年 —</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○足利市教育目標推進委員会の設置</li> <li>・第一回 教育目標具現化推進計画検討</li> <li>・第二回 講演「足利市の教育目標具現と行政のかかわりについて」 河野重男先生</li> <li>○教育目標説明会の実施</li> <li>・主に「子育て」についての視点からの話し合い</li> <li>○教育目標ポスターの募集・作成・掲示（三種類作成）</li> <li>・「あいさつで つくる人の輪 心の輪」</li> <li>・「最後まで やり通した子に 光る汗」</li> <li>・「泣いて勝てれば 勝つまでわめく」</li> <li>○足利市生涯教育振興大会における実践例の発表</li> <li>・「足利市の教育目標」をふまえた学校教育目標の見直しとその実践 大月小学校等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四月 教育委員会の各課代表</li> <li>・六月 十五ページ 全戸配布</li> <li>・六〜一月 開催数 八十回</li> <li>・参加者総数 八、五〇〇名 幼・保・小・中学校のPTA、自治会、教育関係団体等</li> <li>・六月 幼・保・小・中・高等学校の管理職</li> <li>・九月 幼・保・小・中・高等学校の教務主任、社会教育関係者、等</li> <li>・一〇月 関係各課長等</li> <li>・十月 推進委員会委員</li> <li>・一月 推進連絡会議・推進委員会</li> <li>・五月〜一月 開催数四十回</li> <li>・参加者総数 二、五〇〇名 幼・保・小・中学校のPTA、推進委員所属団体等</li> <li>・応募総数 二八〇名</li> <li>・自治会館・集会所・市・県国有施設・公共施設・駅等に掲示 一、五〇〇枚</li> <li>・十一月 市民・教育関係者団体PTA等 約一、三〇〇名参加</li> </ul>

昭和五十八年度

——各主体者による目標設定と実践の年——

○教育目標学習会の実施

・主に「我が家の教育目標づくり」を中心にして

○教育目標ポスターの募集・作成・掲示（三種類作成）

・「ことばより うしろ姿で 子は育つ」

・「みなおそろ 豊かな自然 ほこれる文化」

・「スポーツで 汗を流して さわやか笑顔」

○「教育目標だより」の創刊

・市民の目的的な生活実践のようすを紹介

○生涯教育振興大会における実践例の発表

・「足利の教育目標」の具現をめざす公民館活動のあり方 社会教育課長

○推進連絡会議における「教育目標の具現と各課業務内容（事業）との関連

検討 等

昭和五十九年度

——教育目標具現状況評価実施の年——

○教育目標具現状況評価の実施

・市民の目的的な生活実践状況

児童期～高齢期

・よき家庭人としての生活実践状況

・各地域における自主的な活動の実践状況

・学校と地域社会とのかわり状況 等

○「教育目標だより」の刊行

○生涯教育振興大会における実践例の発表

——「足利市の教育目標」の具現と学校教育のあり方——

・「体験を重視した教育の実践」「福祉の心を育てる教育の実践」「体験学習における師弟同行の試み」

○教育目標推進委員会・推進連絡会議合同による講演会「二十一世紀に生きる人づくりをめざして」

河野重男先生

・五月～二月 開催数二十回

・幼稚園・保育園・保育所の保護者等

・応募総数 二九二名

・前年度と同様 一、五〇〇枚掲示

・年間二回刊行 各自治会を通して、全戸回覧

・十一月 約一、三〇〇名参加

・八月 推進連絡会議委員

・実施時期 九月上旬～下旬

対象 抽出市民 八、一七五名、小・中学校・公民館・市役所各課

回収率 九三%

・年間三回刊行 全戸回覧

・十月 教育関係者、PTA等 約一、三〇〇名参加

・二月 推進委員会委員、推進連絡会議委員、幼稚園・保育所長、小・

中等学校長 公民館館長 等

昭和六十年年度 — 評価のまとめの年 —

- 「足利市の教育目標」 具現状況評価報告書刊行
- 市民啓発のための広報映画の製作
- ・ 「足利学校のあるまち足利」 — 生涯学習の時代 —

- ・ プロローグ
- ・ 足利市の概況
- ・ 「学校様」
- ・ 学習活動への参加
- ・ ひろがり・展望
- ・ エピローグ
- ・ 教育目標の設定

- 「教育目標だより」の刊行
- 生涯教育振興大会における実践例の発表
- 在学青少年のための「少年の砦」の活動
- 推進委員会・推進連絡会議合同会議における具現状況評価結果の考察と課題摘出
- ・ 講演「教育改革の動向」臨教審の審議をめぐって 河野重男先生 等

昭和六十一年度 — 評価の結果を生かす年 —

- 広報映画「足利学校のあるまち足利」の完成と活用
- ・ 生涯学習の必要性を茶の間へ届けるためにビデオテープに変換
- 市民への貸し出し開始

- ・ 各地域における映画上映と学習会の開催
- 「教育目標だより」の刊行
- ・ 市民と行政がともに取りくむべき課題（特集）
- 生涯教育振興大会における実践発表
- ・ 講演「今日教育に問われているものは」  
—— 家庭の役割と大人の責任 野村生涯教育センター 肥土桂子先生
- 推進委員会・推進連絡会議における研修会
- ・ 講演「地域の教育力を高めるために」上越教育大学教授 新井郁男先生

- ・ 六十一年三月刊行
- ・ 十六ミリ映画、ビデオにダビング
- ・ 監修河野重男先生

- ・ 年間三回刊行
- ・ 全戸回覧
- ・ 十一月 約一、三〇〇名参加

- ・ 五月、一月 推進連絡会議委員・推進委員会委員、幼・保・小・中学校長、教頭、公民館長 等

- ・ 六月に完成 市民会館、市民プラザ、公民館の市民教室等で三十二回上映

- ・ 市民への貸出し — 各公民館・図書館
- ・ PTAの貸出し — 幼・保・小・中学校等に配備
- ・ 市内八か所で開催 参加者延べ一、一〇〇名
- ・ 年間二回刊行・全戸配布
- ・ 十一月、約一、三〇〇名参加
- ・ 年二回開催

昭和六十二年度

——点から面へ拡大していく年——

○各地域における学習会の開催

○「教育目標だより」の刊行

○市民の目的な生活実践についての作文集の刊行

・七つの教育目標内容ごとの実践例紹介

○学社連携協議会の設置

・公民館職員と学校の社会教育主事有資格者の共同実践研究

——学社連携により創りだされる教育活動——

○生涯教育振興大会第十回記念大会実践発表

・足利の幼・保・小・中・高の教員で組織する足利教育会制定の「足利のうた」を足利市児童合唱団による披露

・記念講演「生きがいとしての生涯学習」

河野重男先生

○推進委員会・推進連絡会議における研修

「生涯学習のあり方について」 講師 立教大学教授 岡本包治先生

昭和六十三年度

——点から面へ拡大していく年——

○教育目標具現にかかわる行政各課の施策・事業の調査

○「教育目標だより」の刊行

○「学社連携だより」の刊行

○「学社連携により創り出される教育活動」の研究実践の発表会開催

○生涯教育振興大会における実践例の発表

三例発表 「お父さんの寺小屋教室」

「私たちの婦人学級」

「老人クラブの社会参加・伝承活動」

○推進委員会・推進連絡会議における研修

・行政各課調査内容検討

・次年度実施予定の「第二次教育目標具現状況調査」計画検討

・「生涯学習について考える」講師 国立科学博物館長 諸澤正道先生等

・六月～一月 市内七か所で開催

・年間三回刊行 全戸配布

・実践例 五十一点集録 六十五ページ

市民・教育関係者へ配布

・公民館職員 小・中学校教員 十二名委託 二年継続研究

・十一月 約一、三〇〇名参加

・郷土の自然・文化・歴史をおり折り込んだ曲

・年二回開催

・八月と三月二回実施

・年二回刊行 ・全戸配布

・対象 社会教育関係者・学校教育関係者 約一二〇名

・十一月 約一、三〇〇名参加

・年二回開催











読売教育賞は、世の中にたくさんある教育賞のなかで、「賞の賞」と言われるものである。教育実践家ならば、一度は取ってみたい、と考える。だが、今年、例年にくらべ、応募者がすくなくった。なぜか。審査員の一人は、こう分析する。これは、おそらく学習指導要領改訂のためであろう。

学習指導要領の改訂がはじまっており、小中学校はそれに合わせて、自校のカリキュラムを改新せねばならぬ。ベテランの、つまり、読売教育賞の受賞に値する先生ほど、その方にエネルギーを費やさざるを得ない。

そういえば、学習指導要領の改訂によって影響を被る、いわゆる主要学科が軒なみ応募減となり、国語科だけが昨年にくらべ微量増となっている。ただし、これには、よい反面もあるので、毎年応募が少なくて、関係者を悲しませる社会教育が、十一編と数を伸ばし、内容的にも著しく向上した。最優秀が二名というのも、たぶん、読売教育賞はじまって以来の現象とおもわれる。この社会教育の活性化は、全国的に盛り上がっている。

## 活性化した「社会教育」

波多野 完 治

ある「生涯学習」活動と無関係であるとは思われず、今後この傾向が継続することを願っている。

このほかに、読売教育賞にふさわしい事象として、定年に達し、または任期を終えた大ベテランが、一生をふりかえって、後進のために、自分の記録を書きのこした、という種類のレポートがいくつか入賞したことが挙げられる。読売教育賞は、水準が高く、教職一年二年の新進が入賞することは、ほとんど不可能とみられている。これは読売教育賞としては、不本意なことであって、読売教育賞は、大ベテランの長年の苦心に多少の褒賞をさし上げると同時に、教育界に新風をまきおこした新しい試みをも表彰したい、と願っているのである。今後は、そういう新進の教育者の応募をねがう。

ひとつ、好調であった体育が、さっぱりよいリポートにめぐまれないこと、また、幼児教育と英語教育が不振であったことは、審査員を一樣に悲しませた。

### 教育賞選考委員（順不同・敬称略）

お茶の水女子大学名誉教授  
国立教育研究所長  
東京学芸大学学長  
都留文科大学学長  
昭和女子大学教授  
日本大学教授  
お茶の水女子大学教授  
筑波大学名誉教授  
早稲田大学教授  
名古屋大学教授  
国立教育研究所科学教育研究センター長  
読売新聞社文科部長

波多野 完 治  
鈴木 四 郎  
関 田 薫  
上 山 滋 比 古  
外 山 正 久  
碓 井 次 郎  
太 田 茂 男  
大 内 喜 悦  
藤 原 悦 男  
日 比 喜 裕  
沢 田 利 夫  
後 藤 文 生